



文化学園リポジトリ

Academic Repository of BUNKA GAKUEN

服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学

Bunka Gakuen University

文化服装学院

Bunka Fashion College

文化ファッション大学院大学

Bunka Fashion Graduate University

文化外国語専門学校

Bunka Institute of Language

Title	共同体とアート・プロジェクト
Author(s)	岩塚, 一恵
Citation	文化・住環境学研究所報 : しつらい 6 (2015-03) pp.8-11
Issue Date	2015-03
URL	http://hdl.handle.net/10457/2359
Rights	

2

共同体とアート・プロジェクト

コミュニティ

岩塚一恵

建築デザイン研究室

はじめに

近代社会が生み出した地方の過疎化と都市の過密化は留まる所を知らず、地方では、観光振興産業を筆頭に公共事業や大規模開発が一時の緩和策として講じられては来たが、それら成果の大半は既に収束へ向かっていると言えるだろう。近年では、こうした問題が都市部に於いても深刻に取りあげられるようになっており、高齢化による独居や空洞化の問題が日々叫ばれている。そうした中、近年、アート・プロジェクトと呼ばれる活動が街の形成・再生にとって重要な要素の一部であるという一定の認識が、急速に浸透した。子供や高齢者にとっても、農村においてもアート・プロジェクトは身近な出来事になりつつある現代において、急速な発展を遂げたジャンルのひとつと言えるだろう。しかし同時にアート・プロジェクトと呼ばれる現象は、所謂「^{アート}芸術」と呼ばれる領域とは一定の距離を保ち、煩雑さを極める膨大な活動に対する便宜的な呼び名として存在しており、その一端に対する批判精神を孕んでいるようにも感じられる。

しかしながら、私が日々感じることは、アート・プロジェクトとは、煩雑ではあるが未知の可能性を秘めた実験的活動に対する呼称であり、それらの中で起こりうる出来事は多様であることを、鑑賞者やアーティストが認識し始めているという事である。更には、そうした出来事に地域住民や鑑賞者が自発的に関わりを持つことで、地域にとって何か重要なコトに変容していく可能性に、我々は気づき始めている。言い換えれば、アート・プロジェクトは「^{アート}芸術」と呼ばれる領域とは異なる、身近なコミュニケーション・ツールの一つとして、新しい機能を獲得しつつある。今やアート・プロジェクトは、触れる事も、体験する事も、時には誰かと何かを共有し、生活の根本が変化する程の出来事となる可能性をも孕んでいる。アーティストは鑑賞者対話し、地域住民や鑑賞者との関係性の中で作品が成立する。アート・プロジェクトはアーティスト自身の力だけでは成立し難い出来事の

総称となっている。

変容するサイト・スペシフィシティ

私がまだ学生の時分、ある地方の小さな芸術祭に参加する機会を得た。会場は山間部の広大な屋外空間に設定され、また地域性や文化の異なる異国であったことも相俟って、初めて現代美術における、所謂「サイト・スペシフィシティ」とよばれる現象を実質的に体験することとなった。特に興味深かった点は、アーティスト達が滞在制作をする中で地域住民と共に生活し、対話し、試行錯誤している状況であった。そうした時間は、実質的に制作に当てた時間よりも遥かに膨大であり、労力を伴うものだった。

そして、こうした「サイト・スペシフィシティ」はとりわけ地域の日常や、鑑賞者との結びつきを意識せざるを得ない、極めて現代的な関係性によって成立していた。

一方、建築・都市計画の分野に於いて「サイト・スペシフィシティ」に類するものとして「ゲニウス・ロキ」或は「敷地の読み込み」と言った概念がある。単的に言えば、その土地の持つ歴史的背景や特徴を読み解いて都市、或は建築の計画をする必要がある、ということである。これに対し、現代美術における「サイト・スペシフィシティ」は、行為者と鑑賞者という双方変数によって生成される点が特徴であり、多分に偶発的要素の大きい「環境」との関係性によって成立していた。歴史的変遷や敷地の特徴という、ある事象を解釈する事により成立する「ゲニウス・ロキ」や、近代美術の「サイト・スペシフィシティ」における具体的な場所との関係性よりも更に複雑な、現代美術における「サイト・スペシフィシティ」の不確定性に当時は大変困惑した。無論、当時持ち込んだアイデアや計画は、様々な外因により大きく変化していったが、一方で感興をそそるそうした経験は、今思い返せば、現在の活動の糧となるような、貴重な体験であった。そして、私にとってこうした体験は、現在のアート・プロジェクトの中で起っている様々な

現象に対する原初的体験であったし、展示、公演、或は設計というよりも、まさにアート・プロジェクトを介した共同体の生成であり、私はこうした活動が、都市、地域、まち、共同体を再構成する重要な要素になり得ると考えるようになった。

このような、周辺環境との関係に着目する現象の発端を辿ると、1990年代の欧州美術シーンにおける「リレーショナル・アート」に辿り着く。「関係性の芸術」と邦訳されるこの現象^{スタイル}は、例えば、鑑賞者が作品の一部に参加する、あるいは持ち帰ることで成立するなどといった型式を筆頭に、作品と日常(鑑賞者)との関係性を重視する点で、当時非常に注目されていた。そして数年後、日本においてもこれらに類する形態の作品が徐々に展開されはじめると、2000年前後を皮切りに、各地で日常的空間に類する場(農村、街中、倉庫等)を舞台として、近隣住民を含む鑑賞者を対象とした芸術関連イベントが開催されるようになっていく。この頃から、文化政策のアプローチとして、地方自治体や文化事業が《アート》を題材に、地方の過疎化問題や都市の空洞化対策を目的とした事業を展開して行くことになるのだが、同時期に登場した未だ萌芽期のアート・プロジェクトのアウトリーチに反応していたことを鑑みれば、文

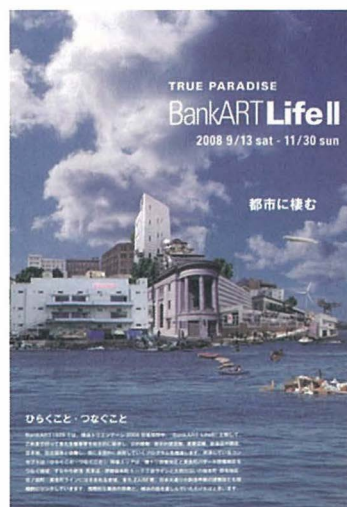


図1：横浜市の芸術関連施設がコラージュされたパンフレット（「BankARTLifeII」）



図2：黄金町バザールの様子

化政策としては非常に挑戦的な方策だったのではないだろうか。

独立していくアート・プロジェクト

初期の公共事業によるアート・プロジェクトの好事例として挙げられるのは、横浜市である。横浜市は、開港都市として明治期から形成された西洋風の建造物や多国籍文化など、港湾都市特有の都市資源を再活用し、一定の成果をあげた「横浜トリエンナーレ」と連携しつつ、都市資源を再活用した「創造都市構想」事業に2003年から取り組んでいる。現在では、近隣の建造物の多くが芸術関連施設や教育施設として再活用され、横浜＝アートの街、といった新しいイメージを形成してきた。(図1)横浜市の注目する点は他にもある。それは大規模文化事業とは切り離された、市民を中心とした草の根的芸術活動の広がりである。現在ではかなり大規模になってきた「黄金町バザール」もそうした活動から始まったアート・フェスティバルの一つである。黄金町バザールでは、嘗て違法飲食店と呼ばれた小規模店舗を借上げ、リノベーションを行い作家へ貸し出す事業や、京急線高架下の耐震工事後の空き地を利用したスタジオでのイベントを継続して開催しており、嘗てのドヤ街であり、また風紀上近寄り難いイメージのあった黄金町一帯の独特な^{コミュニティ}共同体と、アーティストや来訪者を共存させる貴重な役割を担っている。(図2)また、横浜市では、地元住民によるアートボランティア・ネットワークや、アート関連非営利団体の活動も日々顕著になっており、現在のアート・プロジェクトの一端が、嘗ての大規模プロジェクトとは異なる、新たな潮流を生み出している先例と言えるだろう。

もうひとつの新しいアート・プロジェクト事例に関して、私がこの数年関わる向島地域の活動に触れて



図3：向島地域で開催されたイベントの様子 (yahiro8「ロジ展」)

みたい。

向島とは、隅田川、荒川、旧中川、北十間川に囲われた墨田区の北部地域を指し、所謂東京の下町エリアとして昔ながらの民家と町工場が軒を連ねるエリアである。江戸時代の武士たちの路地園芸文化や祭りの風習、また嘗ての花街としての風情など、戦火に堪えた街並と共に独特の文化も根強く残っている。加えて、関東大震災、東京大空襲を経験している向島地域では、現在も防災まちづくりや市民活動が活発であり、まち自体の魅力も相まって、専門家や学生が度々訪れる土台があった。

そのような向島地域が現在のようアート・プロジェクトと関わりを持つに至る背景には、魅力あるまちでありながらも地域一帯は高齢化による空洞化が深刻化していること、衰退していく町工場産業や手仕事に対する関心の高まりが関係している。2000年頃、向島地域には700件近くの空き家があり、中には廃業した町工場や、老朽化してはいるが、手を入れれば安価で住まえるユニークな建造物が多くあった為、住居兼アトリエを必要とする若い作家にとっては十分魅力的であり、彼らは挙ってこの地に住まい始めた。私自身の向島への転居のきっかけもアトリエ兼住居となる環境を求めた結果であったが、そうした要望に対する潤沢な選択肢、特徴的な街並みは群を抜いていた。また、同時期に普及したリノベーション(用途/機能変更を含む改修)は若手作家にとって大変魅力的な手段であり、旧店舗や旧工場がアトリエ兼住居へリノベーションされていった。向島に移り住んだ最初の世代の作家たちに街の資源が活用される中で、数珠つなぎ式に物件紹介、複数のイベントが開催されて行き、向島を拠点とする作家が次々と居を構え始め、ネットワーク化したアート・プロジェクトの拠点は現在も広がり続けている。例えば、2009年から2012年まで開催されたアート・プロジェクト「^{ぼくどう}墨東まち見世」や、現在も行われている



図4：向島地域で開催された「墨東まち見世」の様子
（「墨東まち見世アート・プラットフォーム」）

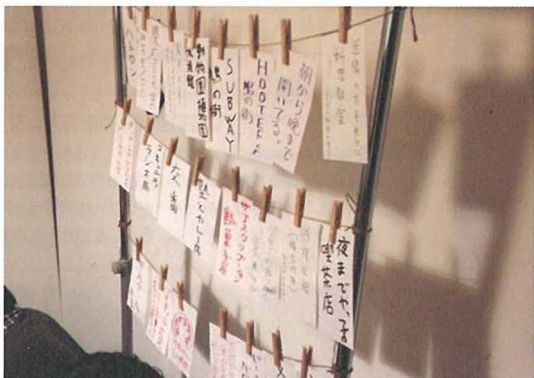


図5：向島地域の作家によるミーティングの様子
（「墨東まち見世アート・プラットフォーム」）



図6：向島地域の作家と住民によるミーティングの様子
（「墨東まち見世アート・プラットフォーム」）



図7：向島地域の作家と住民により開催されたイベント
（「ボクらのこれから2013」パンフレット）

サンキュー
「39アートin 向島」を筆頭に、向島地域在住のアーティストによる地域密着型の多数のプロジェクトが有機的に開催され続けている。(図4) 加えて、若手アーティストが町工場へ弟子入りをし、町工場の技術を自身の作品や、町工場の新しい製品開発へ生かすなど、地域住民とアーティストの共働プロジェクトも試みられ始めている。

現在ではこうした活動が浸透したことで地域の理解も徐々に高まっており、近隣一帯は東京スカイツリー建設による再開発の波に揺れながらも、アーティスト(兼住民)と地域住民が一体となり、アート・プロジェクトを通じたコミュニティの在り方と、まちのあり方を模索し続けている。(図5、6)

動き始めたコミュニティ

こうして、幾つかのアートプロジェクトの中に身を潜め、あるいは俯瞰することで見えてくることは、いずれも住民がアート・プロジェクトに徐々にではあるが、関わって行こうとする姿勢であり、まさに地域のコミュニケーション・ツールとして機能していることである。そして公共事業の一環として、アート・プロジェクトとまちづくりは表裏一体のように語られてきたが、多くの経験を積んだ地域の認識は更に次の段階へ進みつつある。アート・プロジェクトの担い手は、嘗ての行政主導の大規模プロジェクトからは距離を置き、地域の住民へ移行し始めている。そうした地域では、ひとことに「まちづくり」として括れない、様々な問題が浮上するのだが、独自の解決法を探り奮闘を続けている。(図7) 一方で、地域独自の活力やネットワークを糧に、住民自身がアート・プロジェクトを企画し、独自のスタイルを生み出し始めている。こうした原動力のひとつは恐らく、地域のなかで徐々に薄れつつある共同体への愛着の存在であり、住民自身に再発見されたまちの魅力とアート・プロジェクトを媒介にして、無くした共同体を取り戻そうとしているようにも見えてくる。そんな事を考えながら、私は地域とアート・プロジェクトの狭間に身を委ねている。